

鶴
お
字
小
針
江

田中藤穂





鶴
村
字
小
鮎
江

田
中
藤
穂

あを創刊十周年記念句集

限定五部



1
2000 ~ 2003

冬ぬくし
検針婦より
励まされ



弟の来さう桜の散る夜なり

新樹光自画像のみな傷ましく



浴衣の娘どつと乗りきし都電かな

浦島草ゆらゆら吹かれ海を見る



喪ごころや泰山木の花を掃く

忘れ草忘れむに色濃すぎるよ



秋の水雲を流してみたりけり

短日の病院行のバスの混む



紙を漉く小屋に夜昼木の実降る

潮煙高き日に来ぬ野水仙



ま
っ
す
ぐ
に
寒
夕
焼
の
海
へ
歩
く

夫
に
蹤
く
木
道
雉
の
飛
び
立
て
り



新樹の下小さな象のぬいぐるみ

花桐や友の記憶にわが生家



志高かりし日よライラック

ロビーまで新樹の匂ひ人を待つ



あま味ありクレオパトラの菘菫豆

火祭の夜空に大き富士の影



明け易し夢に小さな弟泣き

炎天へ一歩踏み出す深呼吸



愛憎はこの世のこと盆の花

回復の子と歩を揃へ鷺草園



姉逝きてこの駅降りず雁来紅

鮫鯨鍋つつき六根穢しける



秋草のどれより枯るる夜の雨

秋の雨子と渡る夜の歩道橋



蠟色の夜明け秋思の椅子に在り

鏡屋のガラス青青初しぐれ



醒めずあれ母と居て火を熾す夢

せかせかと看取りの暮し山茶花散る



灯をともす心の枯野敗けられぬ

オリオンやしんしんと髪冷えてきし



三宅島の珍鳥の来て庭芽吹く

春みぞれ砂壇の絵を崩しゆく



贗物の大きな仏画春の雪

湯を出でて鰈のごとく春眠す



囀
や
一
氣
に
登
る
五
十
段

稿
了
へ
し
肩
の
痛
み
よ
青
蚊
出
づ



花御堂
葺きて濡れたる僧のみ手

父と似る
従弟と居りぬ
天の川



辛
塩
の
鮭
の
一
と
切
涼
雨
き
ぬ

ま
だ
散
ら
ぬ
凌
霄
花
の
意
志
風
の
空



夏惜しみ生命を惜しむちぎれ雲

秋しぐれ病人の掌の柔らかく



黄泉へ発つ吉原繋ぎの浴衣着て

思ひ出やカクタスの白溢れ咲く



茗荷汁よきことのみを記憶せむ

戸籍一人秋風爽とまた寂と



えぞしかよ綿虫が舞ひはじめたぞ

夫なしの枯野の広さおそれけり



とどめ得ぬ時除夜の鐘鳴りはじむ

初湯して看取りの日日を去年とする



大根煮る一人暮しの湯気立てて

わが声にわれのおどろく冬の居間



綿虫や切なき記憶捨つるべし

霜夜しんしん大椀に盛る薩摩汁



柊咲き奈良に細身の阿修羅像

川二つ渡りきて坐す初句会



皮むいて野の息のごと独活にほふ

小鳥屋をバスが過ぎゆく時雨雲



寒牡丹一大輪の波濤めく

亡き人の幾人も居し春の夢



たんぽぽや片恋に似て子を思ふ

花曇軍靴が胸を踏みにじる



夕波や若布干場のかさこそと

ゆつくりと身の枷を解く青葉雨



芍薬を活けて狭めし廁かな

大いなる梅雨満月に向き歩む



羽抜鶏 おびえるな おびえるな

金魚売 うりごゑも水泳ぐかに



コスモス畑
眸少女になっ
てゐる

背中より風
くる座敷
魂祭



上海蟹ぶつぶつ築地市場しぐれ

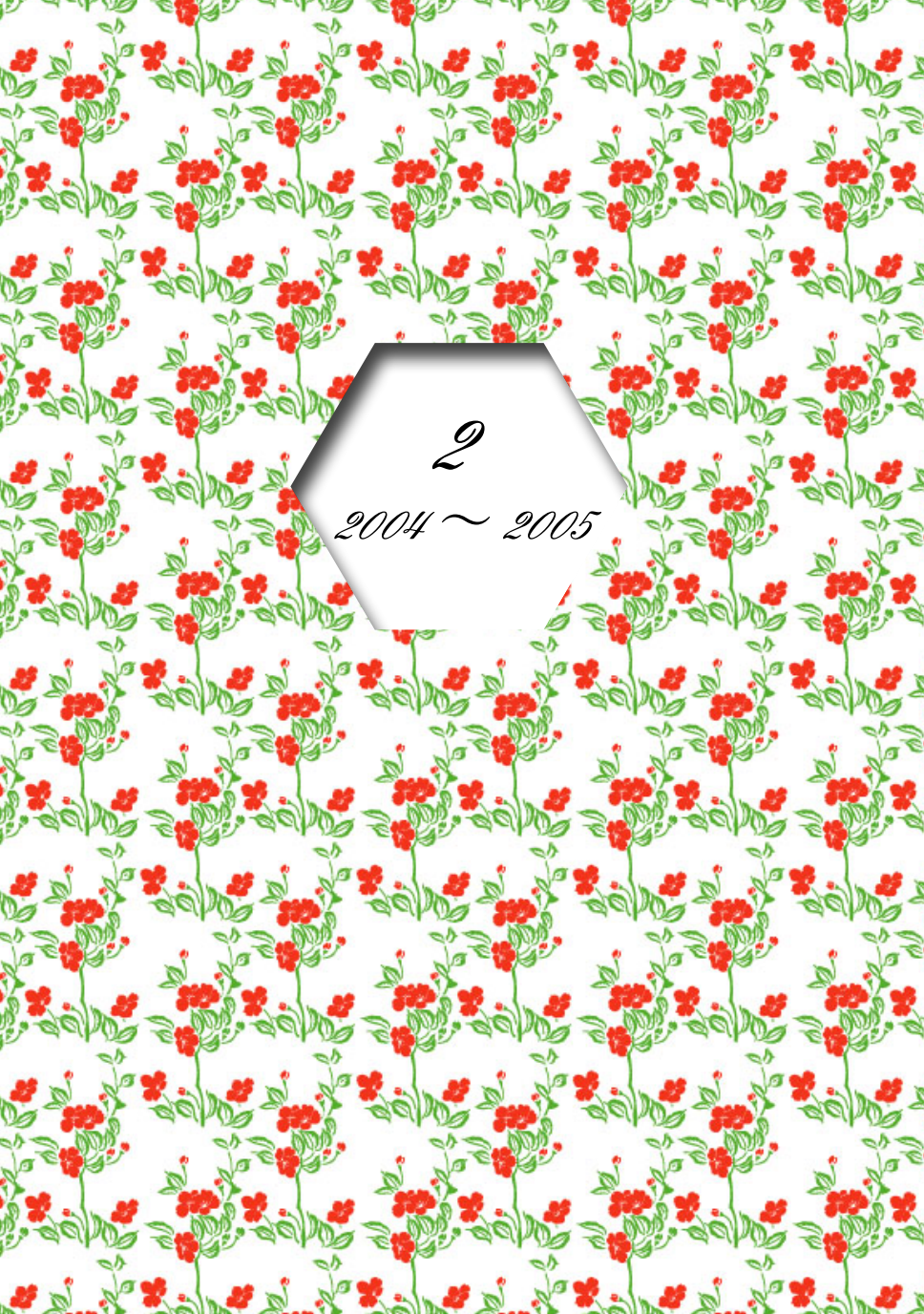
夜の秋独り畳にねそべりて



刃を研いで水を濁せる夕月夜

天折の兄の名忘る網鬼灯





2

2004 ~ 2005

何処へ行った殿様バツタと弟は

築地時雨刃物屋の奥刃物研ぐ



霜月の蝶たましひのやうにとぶ

蔦紅葉記憶ほろほろ欠落す



棲みなれて行人親し落葉掃く

老人のみな似て通る枯木立



猿年のふるまひ酒を雪の駅

蕎麦つゆの味の濃かりし片時雨



風車の切る春の夕空踊子草

モ
ン
ゴ
ル
の
岩
塩
壺
に
鳥
曇



忌を修す遠く流るる春の雲

仁王門牡丹桜にかくれさう



山風や枕木に合歡散つてをり

評決の多勢に無勢ソーダ水



盃蘭盆会話題の多き仏なり

遠く来し知床五湖に夏の霧



するすると衣脱ぎし蛇発光す

芍薬やわが日々の夢度しく



人責めて傷を深めし夜の青葉

フランスへ行くか行かぬか茄子を煮る



月山をうしろに栗の実り初む

隣より曇割れし音梅雨の月



梅雨冷や青赤黄色江戸の地図

死と隣なりし青春緋のキャンナ



半夏生草荒地の残る寺の奥

大股に蟻を追越し夕日落つ



手鏡の曇りを拭ふ夕月夜

もてなしのいつも白玉なりしこと



秋
祭
狸
せん
べい
い
膨
ら
み
ぬ

少
年
は
ガ
ラ
ス
の
脆
さ
秋
の
虹



秋めくや開きて閉づる時刻表

秋霖の駅舎ステンドグラスかな



昔日の跡さがす街うろこ雲

遠く来し姉の菩提寺栗拾ふ



秋光燦
礼拝堂の
絵ガラスに

マリア像買はずに秋の津和野かな



秋の木の根元に影を置いて来し

寒林やマテイスの赤を着て歩む



聖夜くらき犬屋の角を曲りけり

猩猩木一と鉢に足る聖夜なり



白鳥の裏切り水掻がまつ黒

雪あたたか夫のことまた母のこと



竜の玉こぼれて海の色湛ふ

十二月一葉新札ふところに



喜劇観し日比谷に春の灯の溢れ

冬月や犬屋の檻に犬坐り



催花雨ににじみて着きし端書かな

大椎や芽吹きて天へ光撒く



鵜
村
字
小
鮒
江
の
春
の
水

ゴ
ン
ド
ラ
の
や
う
な
月
あ
り
春
の
町



春雷の中来し人を招じ入る

天上に五衰の天女桐の花



端午の日鉢を割りたる根の力

葉桜がざわざわ遠い火事が見え



逝かれしと人伝てにきく暮の春

春なれやはぐれし人の行方はも



蘭
鑄のひれ
絢爛と梅雨に入る

梅
雨冷や男は女より淋し



サイパンは戦跡の島夏木立

親捨てずこころざし捨つ野分雲



夕虹や母に呼ばれるかくれんぼ

無一物なりし戦後よところてん



櫛
職
人
山
霧
の
中
戻
り
く
る

母
衣
蚊
帳
に
母
子
の
寝
息
風
渡
る



音立てず門の鍵開け夜の秋

たけくらべのやうな恋あり星祭



大玄関開け放つたる木槿寺

時雨忌や桐箱の壺大切に



落蟬を草へのせれば動きけり

しみじみと母を恋ふ日や大根煮る



晩年の父も独り居石露の花

鳩の影人の影美術館秋



篠笛の指秋風をあやつれり

十六夜の不意の客ある立居かな





3

2006 ~ 2010

抱きとむる老身柔し木の葉降る



餅焼くや正直の血は父母に受け

枯野より貴婦人といふ汽車の着く



寒星や八犬伝をうろおぼえ

うすらひやきのふをとほき日とおもふ



如月や語尾のやさしき人と居る

風花や雄鶏が土間通りけり



薄紙につつまむ御室の落花かな

傍らにあたたかき人の春の雪



ポトポトと樹液降るなり鳥曇

牡丹咲く頃来られよと言はれしが



花の客膝くづしゐる六畳間

大夕立都電の車輛浮くごとし



緑蔭に入るや淋しき耳二つ

松落葉踏みて舞子の木履は



釣忍いく度も同じこと問はる

七月の水さらさらともものわすれ



宇治川を小舟に揺られ春ふかし

桃洗ふやうに病人湯浴みさす



草を取る朝涼に身を浸しつつ

大花火終りて戻る潮の音



夕立過ぎ木場は町中木の匂ひ

雲の峰サイパン島を取り囲む



秋の雨「思ひ出横丁入口」です

汗にすべる眼鏡を押し侘虜記読む



大文字一字の着火遅れをり

老いてみな小さくなりぬ秋彼岸



十六夜や天袋より仕込杖

秋の雨止り木に客一人居り



別れぎは夕三日月を指させり

豊饒や青葡萄の名はナイアガラ



梟の鳴く夜は父の膝に居る

着ぶくれの夫を唾へり夜の雨



訪うて先づ天女と逢ひし冬伽藍

通し鴨来し鴨ややあつて馴染む



底冷の吉野の夜具のやはらかし

躑げば人のやさしき迎春花



鶏の味濃き新潟の雑煮かな

虹色の鱻に粗塩夕しぐれ



思ひ出のやうに灯の点く冬の窓

引く前の鴨を見にゆく夕まぐれ



干瓢を甘く煮てをり鳥曇

鼠花火兄弟多く育ちたる



草笛やしあはせは逃げやすきかな

深川の人情いまでも花菜漬



風呂敷に草餅のあり父を訪ふ

葉桜や男の料理出来上る



風少しありと炎暑の水道屋

駅頭に栗売る媪われを見る



亡き人を探す郡上の踊かな

とろろ汁信心うすく情の濃く



蕎麦食べて祭の町を後にせり

門前の石段に罅秋の風



転任の教師も居りし秋祭

海に足垂れ秋天の星の数



屋久杉の箸かるやかや新豆腐

かへる道みな別別に冬の暮



ナンにジャムたっぷりつけて聖夜なる

雪の夜のものみな遠く絵蠟燭



煮含める加賀がんもどき浅き春

樟若葉好きと新任教師かな



朧
夜の
一枚
あけ
てあ
る雨
戸

小
糠雨
さく
くら
餅は
や売
り切
れて



かげろふや少年ふたり木の上に

この家は昭和の匂ひ蔦若葉



三月の太平洋に逢ひに来し

老の日は無風に似たり冷奴



心太わらってゆるす物忘れ

観覧車向合ひて坐す卯月かな



竹
活
け
し
部
屋
青
々
と
星
祭

炎
天
来
て
コ
ロ
ー
の
森
の
深
緑



老
懶
か
風
邪
の
名
残
り
か
蓼
の
花

秋
祭
少
年
に
髭
生
え
そ
め
し



枯蓮の隙間の水のとろとろと

前生も後世もうやむや蓮枯るる



木漏れ日のやうな付けひ賀状くる

初春のミャンマー料理青菜かな



金糸魚を得て夕映の中歩く

尼寺の恋文塚の遅日かな



観覧車葉桜の地へ戻りけり

深寝して白地の父と語りきし



吉祥天杉の一木風涼し

夏至の昼おぐらき水族館歩く



梅雨の水ずうっとマンボウは孤独

白秋生家鴨居の低き夏の午後



言海のずしりと重し秋めきぬ

立居して骨の音する露の夜



誘ふには人の老いたり十三夜

郡上秋名水に味なかりけり



思ひ出をかかへすぎたる冬帽子

臘梅や将門の世の水伝ふ



煎餅焼く人の手覗く冬の坂

生きてゐるしるし春灯玄関に



三月十日天金の書を失ひし

冬耕の土くろぐろと光満つ



桜餅見え透く嘘を笑ひけり

桜薬降る道をくる豆腐売



いもうとの遍路終へしといふ便り

しらすぼし平らに乾され海青し



かざぎむらあざこぶなえ
鵜村字小鮒江

著 者 田中藤穂
発行日 2010年11月13日
発行人 佐藤喜孝
装 丁 佐藤喜孝
発行所 竹僊房
製本 花岡製本所

二〇〇一年創刊の「あを」は来年で十周年を迎へます。「九邀」の詩のやうに「花を藝うゑて以て蝶むかを邀むかふべし。書を藏して以て友を邀むかふべし。徳を積みて以て天を邀むかふべし。」ではありませんが、正に良友を邀へるべき俳句を作る、これが「あを」の二つの目標です。そのころを形に表したのがこの「限定一部」の句集です。

この句集はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。句集名は喜孝が興の赴くまま付けさせていただきました。

二〇一〇年十一月八日

佐藤喜孝